

は じ め に

学校長 大石純悟

1 国際障害者年にあたって

1981年(昭和56年)は「国際障害者年」という画期的な年である。すでに国連総会では、1976年に5年後の1981年を「国際障害者年」とすることを全会一致で決議した。その趣旨は、障害をもつ人たちが不利な状態におかれている実態を国民が認識し、その状態を改善することを呼びかけていることも、この国際障害者年の一つの目的である。これは1975年(昭和50年)の国際婦人年と1979年(昭和54年)の国際児童年に続くものである。

国際障害者年のテーマは「完全参加と平等」となっているが、障害者も健常者と同じように、多方面の社会活動へ参加ができ、日常生活に不利とならないために、平等な機会が与えられねばならないという意味が込められていると思う。そのためには、障害者に対して適切な援護、訓練、治療及び指導を行い、適当な雇用の機会や社会における統合を確保するための努力が必要であるし、また各国は国際障害者年のテーマ及び目的を実現するために必要な施策を講じることが要請されている。

障害者の問題を考えるとき、一番われわれが感じることは、日常的に障害者と接する場が大切なことではないかと思う。できるだけ、障害者を分離したり、施設に収容して隔離したりしないで、日常生活に近いノーマルな生活ができるようにするということである。つまりノーマライゼーション(Normalization)という発想である。「社会」という一つの構成体を考えると、そのなかには高齢者もいるし病人もいる、保護してやらねばならない乳幼児もいるし、妊産婦もいるしまた心身になんらかのハンディキャップをもった人たちも混在している。われわれは、この人たちを特別な人たちであると見ている。従って階段をかけあがれる人、歩道橋をわたれる人、また満員のバスに乗れる人たちで構成されている社会がノーマルな社会と見てきた。しかし社会のなかには何%かの障害者たちが含まれている社会がノーマルな社会であるという、ノーマルについての従来の判断の転換をみせてきたのが最近のノーマライゼーションの発想である。このような発想がなければ障害者たちの社会参加も困難をとまなうものである。健常な子供の目に映るお年寄りとか障害児(者)と、一諸に生活して、人間の生涯のいろいろな起伏を直接体験させながら育ていけるような環境をつくるのが大切であって、障害をもっている人や保護されなければならない人を社会生活からはずして、分離、隔離することはノーマルでない社会をつくることになるという反省の意味をノーマライゼーションの発想には含まれていると思う。

ノーマライゼーションに関連して教育の面ではインテグレーション(integration)の問題も世界的に脚光を浴びてきて、わが国でも交流教育の指導形態をもって実施されつつある。従って、今後

の福祉、教育のあり方は、障害児(者)に対する社会の理解に支えられた社会参加(Participation)や教育上のインテグレーションの問題が、地域の実態、学校の実態に即して、豊かな教育活動となって展開されることが必要である。

本校の今回の研究は、国際障害者年のテーマである「完全参加と平等」の基礎的な課題として、教育現場におけるアプローチの仕方を模索しているといってもよい。

2 本年度の研究への態度

本校では一昨年(昭和54年度)、「表現化に視点をあてた教育課程の編成」という研究主題のもとに研究発表しその成果を世に問うた。

本校の目指す教育目標は「社会的自立」であり、障害児たちが将来に向かって社会生活から孤立化するのでなく、社会の一員としての役割を果たすことができるようになるのが目標である。すなわち、たとえ障害があっても、障害の程度に応じて社会人、職業人または家庭人として自立することがそのねらいである。そのための教育過程として四分野からのアプローチの方法を考案した。それらは自立化、社会化、表現化、職業化などである。各分野には、それぞれに発達の段階を設け、それぞれの障害の程度に応じた学習内容を設定している。従って各分野は、それぞれに独立した系統をもちながら、内容的には相互に関連し合っているものである。これらの四分野のなかで、一昨年度からは、特に表現化の観点から他の分野を網羅した教育課程の編成を試みてみた。

上記のように前年度の研究は、教育内容の構成に重点をおいたが、本年度はその教育内容を、段階別教育内容表によってさらに具体的にして、表現化の指導を展開したものである。従って、各学部は、子どもの発達状態に応じて、

- (1) 自立化を通しての表現化
- (2) 社会化を通しての表現化
- (3) 職業化を通しての表現化

という。三つの基本的立場に立って指導内容を構成し、具体的な指導法によって学習を展開することにした。

自立化は社会化の基礎であり、社会化は職業化の基礎となって社会的自立を目指すことになる。今回の研究は、学部を通じ、児童生徒の発達に即して一貫性と系統性をもった指導内容を、諸種の指導形態によって学習の展開を試みてみた。ところで学習内容を設定し、変化に応じた評価をしていくためには、学習の構想を明確にしておく必要がある。今回は学習内容の「構想モデル」を構成し、その立体的な構造から、相互関連をはかりながら指導内容を編成するという新構想をうち建てた。指導法とともにご批判を得たいと思う。